

AQUEOUS WATER AND OIL REPELLENT DISPERSION

Publication number: JP4080218

Publication date: 1992-03-13

Inventor: SHIOYA GENICHIROU; KAMATA TAKASHI

Applicant: ASAHI GLASS CO LTD

Classification:

- International: C08F214/06; C08F214/08; C08F220/22; C09K3/18;
C08F214/00; C08F220/00; C09K3/18; (IPC1-7): C08F214/06;
C08F214/08; C08F220/22; C09K3/18

- european:

Application number: JP19900190817 19900720

Priority number(s): JP19900190817 19900720

[Report a data error here](#)

Abstract of JP4080218

PURPOSE: To prepare the title repellent excellent in storage stability by specifying the concn. of unreacted vinyl or vinylidene chloride in the repellent which contains a copolymer obtd. by copolymerizing vinyl or vinylidene chloride with specific compds. **CONSTITUTION:** In a water and oil repellent contg. a copolymer obtd. by copolymerizing vinyl or vinylidene chloride, a polymerizable polyfluoroalkyl compd. (e.g. a perfluoroalkylethyl acrylate), and a compd. copolymerizable with the polyfluoroalkyl compd. (e.g. diethyl maleate, N,N-dimethylacrylamide), the concn. of unreacted vinyl or vinylidene chloride is regulated to 10ppm or lower.

Data supplied from the **esp@cenet** database - Worldwide

BEST AVAILABLE COPY

⑫ 公開特許公報 (A) 平4-80218

⑬ Int. Cl. 5

C 08 F 220/22
214/06
214/08
C 09 K 3/18

識別記号

MMT
MKF
MKH
102
103

庁内整理番号

7242-4 J
7602-4 J
7602-4 J
8318-4 H
8318-4 H

⑭ 公開 平成4年(1992)3月13日

審査請求 未請求 請求項の数 3 (全8頁)

⑮ 発明の名称 水分散型撥水撥油剤

⑯ 特願 平2-190817

⑰ 出願 平2(1990)7月20日

⑱ 発明者 塩冶 源市郎 神奈川県横浜市旭区鶴ヶ峰2-59-1

⑲ 発明者 錄田 俊 神奈川県横浜市緑区荏田町297-3

⑳ 出願人 旭硝子株式会社 東京都千代田区丸の内2丁目1番2号

㉑ 代理人 弁理士 内田 明 外2名

明細書

1. 発明の名称

水分散型撥水撥油剤

2. 特許請求の範囲

1. ポリフルオロアルキル基含有の重合し得る化合物と塩化ビニルまたは塩化ビニリデンおよびこのポリフルオロアルキル基含有の化合物に共重合可能な化合物とを共重合して得られる共重合体を含む撥水撥油剤中の未反応塩化ビニルモノマーまたは塩化ビニリデンモノマー濃度を10ppm 以下としてなる水分散型撥水撥油剤。

2. 共重合体 100重量部に対する塩化ビニル又は塩化ビニリデンの共重合割合が20~80重量部である請求項1に記載の水分散型撥水撥油剤。

3. ポリフルオロアルキル基含有の化合物に共重合可能な化合物が、水酸基を側鎖に含有する化合物又は、窒素原子を側鎖に含有する化

合物である請求項1に記載の水分散型撥水撥油剤。

3. 発明の詳細な説明

【産業上の利用分野】

本発明は、改良された撥水撥油剤に関するものであり、更に詳しく言えば、高い撥水撥油性と洗濯耐久性を有しかつ製品の経時変化のきわめて少ない撥水撥油剤に関するものである。

【従来の技術】

従来より、フッ素系撥水撥油剤として、ポリフルオロアルキル基含有の重合し得る化合物に塩化ビニルまたは塩化ビニリデンおよびこのポリフルオロアルキル基含有の化合物に共重合可能な化合物とを共重合させたものが撥水撥油性に非常に有用である事が知られている。しかるにこれらの共重合体はエマルションの機会的安定性や長期の保存安定性に劣るという欠点を有していた。

【発明が解決しようとする課題】

本発明の目的は、従来技術が有していた塩化

ビニルまたは塩化ビニリデンを共重合成分として含む分散型のフッ素系相水相油剤において、洗濯やドライクリーニングなどの実用上の耐久性などを阻害する事なく従来品の懸案であった、保存時の経時変化にともなう相水相油剤の形態変化や性能の低下などの問題を有さない保存安定性に優れた相水相油剤を提供することである。

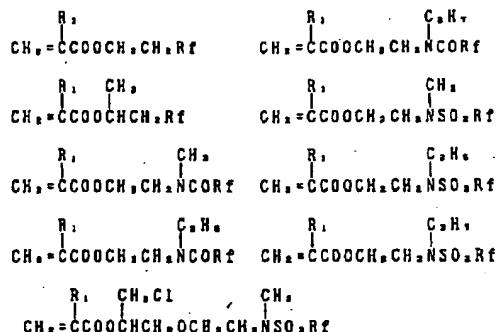
[課題を解決するための手段]

本発明者はポリフルオロアルキル基含有の重合し得る化合物に塩化ビニルまたは塩化ビニリデンおよびこのポリフルオロアルキル基含有の化合物に共重合可能な化合物とを共重合させて得られる分散型のフッ素系相水相油剤の優れた性能と、洗濯やドライクリーニングなどの耐久性をそこなうことなく、保存安定性に優れた相水相油剤を提供することを目的として種々の研究、検討を重ねた結果、塩化ビニルまたは塩化ビニリデンを共重合成分として含む分散型のフッ素系相水相油剤において、重合後に未反

応モノマーとしてエマルション中に残存している塩化ビニル、塩化ビニリデンが、保存安定性を大きく阻害していることを見いだして本発明に至った。

すなわち本発明は、ポリフルオロアルキル基含有の重合し得る化合物に塩化ビニルまたは塩化ビニリデンおよびこのポリフルオロアルキル基含有の化合物に共重合可能な化合物とを共重合させたのちに、エマルション中に含浸している未反応の塩化ビニル、塩化ビニリデンを減圧留去などの手法によってエマルション中から除外しエマルション中の未反応塩化ビニル、塩化ビニリデンの残存濃度を10ppm以下に抑えることで、保存時の形態変化や性能の低下などといった保存安定性上の問題を解消した優れた相水相油剤を供給するものである。

本発明で用いられるパーカルオロアルキル基を含有するアクリル酸エステルもしくはメタクリル酸エステルのごときフルオロアルキル基含有の重合し得る化合物としては、



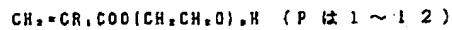
(ここでR₁はHもしくはCH₃)

のごときポリフルオロアルキル基を含有する(メタ)アクリル酸エステルを好適なものとしてあげることができ、これらの2種以上、または炭素数の異なる化合物を2種以上併用することも可能である。

前述のR₁は炭素数3~21個、好ましくは4~16個の直鎖状または分岐鎖状のポリフルオロアルキル基であり、通常は末端部がパーカルオロアルキル基であるものが選定されるが、末端部に水素原子あるいは塩素原子を含む

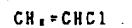
もの、あるいはオキシポリフルオロアルキレン含有基なども使用可能である。

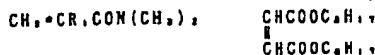
ポリフルオロアルキル基を含有するアクリル酸エステルもしくはメタクリル酸エステルのごときポリフルオロアルキル基含有の重合し得る化合物と共重合可能な化合物としては、以下のごとき、ラジカル反応性の不飽和結合を持った化合物であり、



(ここでR₁はH、またはCH₃、R₂はH、またはC₂H₅...でqは1から23であり好ましくは1~6)

などのメタクリル酸およびアクリル酸もしくはこれらのエステル類や下式で示されるような





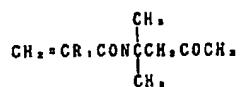
(ここで R_1 は H 、または CH_3)

のごとき (メタ) アクリル酸アミド誘導体、塩化ビニル、塩化ビニリデン等のハロゲン含有ビニルモノマー、エチレン、ビニルアルキルエーテル、酢酸ビニル、マレイン酸無水物およびマレイン酸ジアルキルエステル、ステレン、 α -メチルスチレン、 p -メチルスチレン、アクリロニトリル、ブタジエン、イソブレン、クロロブレン、メチルビニルケトンなどが好ましい。このうち特に塩化ビニルもしくは塩化ビニリデンは必須成分として必要である。また本発明においては、洗濯やトライクリーニング耐久性の向上と保存時の性能低下の防止を目的として、 N -メチロールアクリルアミドを使用することが可能である。また同様の目的のために N -メチロールアクリルアミドの代わりに、より安定性付与に効果的な、窒素を含有する共重合可能な化合物と水酸基を含有する共重合可能な化合

物との両者を必須成分として使用することも可能である。

共重合体 100重量部に対する塩化ビニルまたは塩化ビニリデンの共重合割合は 20~80重量部が適当である。

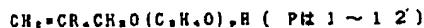
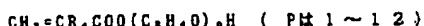
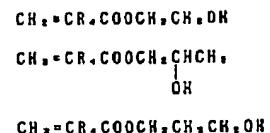
窒素含有する共重合可能な化合物としては、
 $\text{CH}_2=\text{CR}_1\text{CON}(\text{CH}_2)_2 \quad \text{CH}_2=\text{CR}_1\text{CONH}(\text{C}_2\text{H}_5)_2$



(ここで R_1 は H 、または CH_3)

等を好適なものとしてあげることができ、これらを併用することが可能である。

水酸基を含有する共重合可能な化合物としては、



(ここで R_1 は H 、または CH_3)

等を好適なものとしてあげることができ、これらを併用することが可能である。

さらに共重合性化合物として、塩化ビニルまたは塩化ビニリデンおよび N -メチロールアクリルアミドもしくは、窒素を含有する共重合可能な化合物と水酸基を含有する共重合可能な化合物以外に前述の共重合可能な化合物を 1 種以上併用することも可能である。これらのポリフルオロアルキル基を含まない重合し得る化合物を共重合させる事により、撥水撥油性や防汚性、洗濯耐久性、トライクリーニング耐久性に加えて、溶解性、硬さ、触感などの種々の性質を改善することができる。

パーカルオロアルキル基を含有するアクリル酸エチルまたはメタクリル酸エチルのごときフルオロアルキル基含有の重合し得る化合物

とこの重合し得る化合物以外の共重合性化合物との共重合体を得るためにには、塊状重合、溶液重合、懸滴重合、乳化重合などの各種の重合方法を採用し得る。また重合の開始方法も、開始剤による重合、放射線重合、光重合などの各種の重合開始方法を採用し得る。本発明における撥水撥油剤は、有機溶液や有機分散液の形態でも使用可能であるが、染色工程等への適用や、処理作業環境への影響を考慮すると、分散型の形態で使用されることが好ましい。ゆえに分散補助剤として水可溶性の有機溶剤を併用し、界面活性剤の存在下で水中で乳化重合する方法が好ましい。

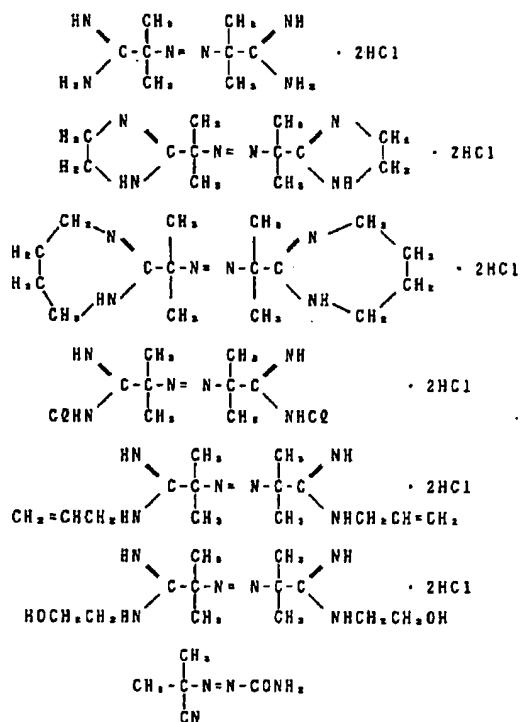
分散型とするための分散剤としての界面活性剤は、ノニオン系、アニオン系、カチオン系、両性系等各種のものが採用可能であり、これらを適宜併用してもよい。具体的にはポリオキシエチレンモノオレイルエーテル、ポリオキシエチレンモノアルキルエーテル、ポリオキシエチレンモノ (アルキルフェニル) エーテル、

ポリオキシエチレンモノオレイル酸エステル、・
ポリオキシエチレンモノアルキルカルボン酸エ
ステル、ソルビタンエステル、ショ糖エステル
などのノニオン系界面活性剤や、3級アミンの
酢酸塩、4級アンモニウム塩などのカチオン系
界面活性剤、アルキルスルホン酸とその塩、アル
キルベンゼンスルホン酸とその塩、アルキル
カルボン酸とその塩、アルコキシポリオキシエ
チレンスルホン酸ナトリウムなどのアニオン系
界面活性剤、ベタイン型もしくはコリン、エタ
ノールアミン等のリン酸エステル型などの両性
系界面活性剤等が好ましい。

水可溶性の有機溶剤の存在は、ポリフルオロ
アルキル基を含有する重合しうる化合物の分散
性を良好にし、他の共重合性ポリマーとの共重
合性を良好にする。この目的に適した溶剤とし
ては、ポリフルオロアルキル基を含有する重合
しうる化合物に対して溶解性のある水可溶の溶
媒であれば特に限定することなく用いることか
ができるが、アセトン、メチルエチルケトンのこ

ときケトン類、エチレングリコール、ポリエチ
レングリコールのごときエチレングリコール誘
導体および、ポリエチレングリコールモノメチ
ルエーテル、ポリエチレングリコールジメチル
エーテル、ポリエチレングリコールモノブチル
エーテルのごときエチレングリコール誘導体の
アルキルエーテル類、プロピレングリコール、
ジプロピレングリコール、ポリプロピレングリ
コールのごときプロピレングリコール誘導体、
シクロデキストリン、デキストリンのごときポ
リエーテル類、酢酸メチル、酢酸エチルのご
ときエステル類などが好適なものとして例示さ
れる。これらの有機溶剤の添加量は、本発明の
重合体 100重合部あたり、通常 2 ~ 300 重量
部好ましくは 5 ~ 120 部の範囲から選定さ
れる。

重合に用いる開始剤としてはアゾ開始剤や過
酸化物系の開始剤のうち水溶性のものをもちい
ることが好ましい。たとえば、



などのアゾ系のアミノ化合物、環状アミノ化合

物、フェニル基を含有するアミノ化合物、ニト
リル化合物の塩酸塩などの水溶性の開始剤およ
び過酸化カリウムなどの水溶性の過酸化物系の
開始剤を好適なものとしてあげられる。重合温
度は開始剤に応じて選ぶことができるが、通常
40°C ~ 80°C が好適である。

重合反応の後に、エマルジョンから未反応の
塩化ビニル、塩化ビニリデンを除く方法とし
ては、特に限定することなく、既存の種々の方法
が利用できる。たとえば、減圧による留去、常
圧加熱下での操作による留去、加熱下での空気
もしくは窒素気流、スチームのバブリングによ
る留去、充填塔やスピンドル、円筒状の捕
発装置などを利用する方法などが例示されるが
特にこれらの例示に限定されない。

本発明の撥水撥油剤を水分散型とした場合に
本発明の重合体の固体分散度は、特に限定され
ないが、通常は 2 ~ 60 Wt%、好ましくは 5 ~
50 Wt% に調製され、加工にあたっては、これ
を水によって 0.2 ~ 1.6 Wt% 程度に希釈した状

態で使用される。そして、かかるエマルション型の撥水撥油剤は、有機溶剤型のものに比して、原液の引火点が高い、固体分濃度を高くすることが可能であるなどの利点があり、さらに加工時の作業環境汚染を極小にすることができるなどの種々の利点を有するものである。

本発明の撥水撥油剤は、被処理物品の種類などに応じて、任意の方法で被処理物品に適用され得る。例えば、浸漬塗布等のごとき被覆加工の既知の方法により、被処理物の表面に付着させ乾燥する方法が採られる。また、必要ならば適当なる架橋剤と共に適用し、キュアリングを行なっても良い。更に本発明の撥水撥油剤に他の撥水剤や撥油剤あるいは防虫剤、難燃剤、帯電防止剤、染料定着剤、防シワ剤などを添加して併用する事ももちろん可能である。

本発明の撥水撥油剤で処理され得る物品は、繊維製品であれば、特に限定なく種々の例をあげることができる。例えば、綿、麻、羊毛、絹等の動植物性天然繊維、ポリアミド、ポリエス

タル、ポリビニルアルコール、ポリアクリロニトリル、ポリ塩化ビニル、ポリプロピレンのごとき種々の合成繊維、レーヨン、アセテートのごとき半合成繊維、ガラス繊維、アスベスト繊維のごとき無機繊維、あるいはこれらの混合繊維及び織物などがあげられる。

[作用]

本発明において、塩化ビニルまたは塩化ビニリデンを共重合成分として含む水分散型のフッ素系撥水撥油剤組成物において、エマルションから未反応の塩化ビニル、塩化ビニリデンの濃度を10ppm 以下にせしめることによって、洗濯やドライクリーニングなどの実用上の耐久性などを阻害することなく従来品の懸念であった、保存時の経時変化にともなう撥水撥油剤の形態変化や性能の低下などの問題を有しない保存安定性に優れた撥水撥油剤組成物を提供することができたが、その理由は明確ではない。しかしながらエマルションの構成成分である塩化ビニル、塩化ビニリデンの部分は、水分散体中で

は、系中に溶存している塩素イオンによって分解が促進され、またその分解速度は、重合体中の塩化ビニル、塩化ビニリデン部分の分子量が低くなるほど加速されることが知られている。重合後のエマルション中に未反応の塩化ビニル、塩化ビニリデンが溶存しているとき、まず、これらの未反応モノマーが、系中に溶存している塩素イオンによって分解されて、新たな塩素イオンの供給源となりえる。この反応によって系中の塩素イオン濃度が上昇するため、モノマーの分解にひき続いて、重合体中の塩化ビニル、塩化ビニリデン部分の分解が加速され、エマルションが破壊し、長期の安定性が低下するを考えられる。そこでエマルション中から、未反応のモノマーを留去することによって、系中に溶存している塩素イオン濃度の上昇を抑え、その結果、重合体組成物の分解を抑制させることで、エマルションの長期の安定性を可能にさせていると考えられる。この説明が本発明を何ら限定するものでないことは勿論である。

[実施例]

次に本発明の実施例についてさらに具体的に説明するが、この説明が本発明を限定するものではない事はもちろんである。

以下の実施例中に示す撥水性、撥油性については、次の様な尺度で示した。すなわち、撥水性は、J I S L-1092のスプレー法による撥水性ナンバー（下記第1表参照）をもって表わし、撥油性は下記第2表に示された試験溶液を試験布の上、二ヶ所に数滴（径約4mm）置き、30秒後の浸透状態により判別した（A A T C C - T M 118-1966）。

第1表

撥水性 N _a	状態
100	表面に付着湿潤のないもの
90	表面にわずかに付着湿潤を示すもの
80	表面に部分的湿潤を示すもの
70	表面に湿潤を示すもの
50	表面全体に湿潤を示すもの
0	表面両面が完全に湿潤を示すもの

第2表

相溶性	試験溶液	表面張力 dyne/cm ² 25°C
8	n-ヘプタン	20.0
7	n-オクタン	21.8
6	n-デカン	23.5
5	n-ドデカン	25.0
4	n-チトラデカン	26.7
3	n-ヘキサデカン	27.3
2	ヘキサデカン 35部 Nujol 65部 の混合溶液	29.6
1	Nujol	31.2
0	1に及ばないもの	—

なお、相溶性ナンバー、相溶性ナンバーに、+印を付したものは、それぞれの性能がわずかに良好なものを示す。

実施例1、比較例1

熱電対式温度計、電流式攪拌機を装着した、ガラス製オートクレーブ（内容積1ℓ）中に、バーフルオロアルキルエチルアクリレート（以下FA）[C₆F₁₃CH₂CH₂OCOCH=CH₂] 120g、ジ

オクチルマレート36g、NN-ジメチルアクリルアミド4g、ヒドロキシエチルアクリレート4g、ポリオキシエチレンラウリルエーテル10g、ステアリルトリメチルアンモニウムクロライド2g、アセトン120g、水350g、アゾビス（ジブチルアミジン）2塩酸塩＜和光化成品V-50>1gを加え、攪拌しながら約20分間窒素置換を行ない塩化ビニル76gを加えたのち、60°Cに昇温し、重合を開始させる。60°Cで15時間保温攪拌したのち冷却し、固体分濃度31%のエマルションを得た。ガスクロマトグラフィーによる共重合反応の転化率は99.0~99.8%（バーフルオロアルキル基含有の重合し得る化合物に対して）であった。また、全反応モノマーに対する安定乳化エマルションの収率は95~99%であった。続いて、60°Cに加熱し、攪拌させながら、窒素ガスによるバーリングを5時間おこない、未反応の塩化ビニルを除いた。ガスクロマトグラムで分析をおこなった結果、重合後に約1000ppmあつ

た未反応の塩化ビニルは、6ppmまで減少した。バーリングによる未反応塩化ビニルを除去した物を実施例1、バーリング前で未反応塩化ビニルを高濃度含む重合組成物を比較例1とした。

実施例2~6、比較例2~6

実施例1と同様の方法にて、モノマー、乳化剤重合開始剤を変更し乳化重合をおこなった。引き続いて実施例1に示した未反応モノマーの除去操作をおこなった。一方比較例2~6では、実施例2~6と同じ仕込み、同じ操作で重合したが、そののち未反応モノマー除去の操作をおこなわなかった。用いたモノマー、乳化剤、重合開始剤を第3表、第4表に示した。

第3表

実施例 比較例 1~6	仕込みモノマー組成 / 仕込み量 (g)	ノニオン系乳化剤 / 仕込み量 (g)	開始剤
1 FA/Vc ₂ /DOM/HEA/NM-MAM	=120/76/36/4/4	新特種乳化剤A-14	第4表C
2 FA/Vc ₂ /DOM/HEA/NM-MAM	=120/70/42/4/4	新特種乳化剤A-14	第4表A
3 FA/VdC ₆ /DOM/HEA/NM-MAM	=120/70/42/4/4	新特種乳化剤A-14	第4表B
4 FA/Vc ₂ /DOM/HEA/N-MAM	=120/70/42/5/3	新特種乳化剤A-14	第4表C
5 FA/VdC ₂ /DOM/N-MAM	=120/76/36/8	新特種乳化剤A-14	第4表B
6 FA/Vc ₂ /DOM/N-MAM	=120/80/32/8	新特種乳化剤A-14	第4表C

Vc₂：塩化ビニル VdC₆：塩化ビニリデン DOM：ジオクチルマレート
HEA：ヒドロキシエチルアクリレート NM-MAM：NN-ジメチルアクリルアミド
N-MAM：N-メチロールアクリルアミド
新特種乳化剤A-14 : E0付加モル数 平均2.0個
新特種乳化剤A-14 : E0付加モル数 平均2.0個
新特種乳化剤A-14 : E0付加モル数 平均1.8個

比較例7~11

実施例1と同様の方法にて、モノマー、乳化剤重合開始剤を変更し乳化重合を行なった。引き続いて実施例1に示した未反応モノマーの除去操作をおこなったがこの際、除去操作の時間を短縮することによって、未反応塩化ビニルモノマーの残存量を調節したサンプルを比較例7~11として得た。それぞれの比較例に残存する塩化ビニルモノマー量を第6表に示した。

以上の方法にて得られた乳化エマルションの固体分濃度を1.2重量%にしたラテックスを原液として、憎水滑油性能の試験を行なった。ラテックス原液を水により希釈し、原液の水に対する割合を、1.5%とした。これに併用樹脂としてメラミン樹脂を形成するスミテックスレジンM-3およびスミテックスクアセラレーターACXを加えて処理液とし、憎水滑油性能を測定した。試験はナイロンタフタ布について行ない、憎水滑油処理は次の様に行なった。即ち、前記のごとく希釈したラテックス処理液に試験

第4表

重合開始剤名称	構造式	重合開始剤略号
2,2'-アビス[2-(2-イソブチリジン-2-イル)-2-(4-メチル)アミノ]		A
2,2'-アビス[2-(2-アミノ-N-[1-(2-アミノ-2-ヒドロエチル)アミノ]-2-ヒドロエチル]アミノ]		B
2,2'-アビス[2-(2-アミノ-N-[1-(2-アミノ-2-ヒドロエチル)アミノ]-2-ヒドロエチル]アミノ		D

布を30秒間浸漬し、2本のゴムローラーの間で布をしぼって、ウェットピックアップを30%とした。次いで、110℃で90秒間乾燥、更に170℃で60秒間熱処理した。かくして得られた処理布について憎水滑油性能を測定した結果を耐久性試験後の憎水滑油性能と共に、下記第5表、第6表にまとめて示した。

第5表

実施例 番号	残存塩化ビニ ル濃度/PPM	憎水滑油性(初期)		憎水滑油性(耐久性試験後)		耐久性試験性(片側試験後)
		憎水性	滑油性	憎水性	滑油性	
1	6	100	5	80	2	滑物なし
2	10	100	6	80+	3	滑物なし
3	8	100	6	80	4	滑物なし
4	8	100	6	80	3	滑物なし
5	10	100	6	80	4	滑物なし
6	10	100	6	80	3	滑物なし
比較例						
1	1000	100	5	80	2	滑物多い
2	960	100	6	80+	3	滑物多い
3	1050	100	6	80	4	滑物多い
4	1020	100	6	80	3	滑物多い
5	1080	100	6	80	4	滑物多い
6	1050	100	6	80	3	滑物多い

*1 50℃での恒温槽中に2ヶ月間放置し、その後のエマルションの状態を目視で観察する。

【発明の効果】

本発明は、塩化ビニルまたは塩化ビニリデンを共重合成分として含むフッ素系水分散型防水滑油剤において、重合反応ののちに、未反応の塩化ビニルまたは塩化ビニリデンをエマルション中から除去することによって、従来の高い耐久性を維持しながら、保存安定性に優れた防水滑油剤を提供することが可能となった。また、保存安定性が向上したことによって、従来安定性の面から供給に問題のあった高濃度品を供給することが可能になった。

第6表

比較例 比	比 例 度 海 度 /ppm	相 相 水 滑 油 性 (初 期)		相 相 水 滑 油 性 (耐 久 試 験 後)		相 相 水 滑 油 性 (耐 久 試 験 後)
		相 相 水 滑 油 性 相 相 水 滑 油 性	相 相 水 滑 油 性 相 相 水 滑 油 性	相 相 水 滑 油 性 相 相 水 滑 油 性	相 相 水 滑 油 性 相 相 水 滑 油 性	
7	20	100	5	8.0	2	沈澱物極少 8.0+
8	40	100	5	8.0	2	沈澱物あり 8.0
9	100	100	5	8.0	2	沈澱物あり 8.0
10	200	100	5	8.0	2	沈澱物多い 8.0
11	800	100	5	8.0	2	沈澱物多い 8.0

*1 50°Cでの貯蔵中に2ヶ月間放置し、その後のエマルジョンの状態を目視で比較する。

明一夫
田亮
内
外
部
代
代
人
人
人
人
人
人

【公報種別】特許法第17条の2の規定による補正の掲載

【部門区分】第3部門第3区分

【発行日】平成6年(1994)4月19日

【公開番号】特開平4-80218

【公開日】平成4年(1992)3月13日

【年通号数】公開特許公報4-803

【出願番号】特願平2-190817

【国際特許分類第5版】

C08F 220/22 MMT 7242-4J

214/06 MKF 9166-4J

214/08 MKH 9166-4J

C09K 3/18 102 8318-4H

103 8318-4H

手続補正書

平成5年6月30日

特許庁長官 殿

1. 事件の表示

平成2年特許願第190817号

2. 発明の名称

水分散型樹脂油溶剤

3. 補正をする者

事件との関係 特許出願人

住所 東京都千代田区丸の内二丁目1番2号

名称 (004) 旭硝子株式会社

4. 代理人

住所 〒105 東京都港区虎ノ門一丁目16番2号

虎ノ門千代田ビル

氏名 弁理士(7179)内田 明



5. 補正命令の日付

自発補正

6. 補正により増加する請求項の数 なし

7. 補正の対象

明細書の発明の詳細な説明の欄

8. 補正の内容

1)明細書第7頁下から第7行の「トライ」を「ドライ」に訂正する。

2)明細書第8頁第6行の「要素」を「要素を」に訂正する。

3)明細書第15頁第19行の「でくる」を「できる」に訂正する。

4)明細書第20頁第1行の「NN」を「N, N」に訂正する。

5)明細書第23頁第4表において「重合開始剤名称」の欄の「2, 2'-アリビス(2-メチルプロピレン)ヒドロカーライド」を「2, 2'-アリビス(2-ミリカルボン)ヒドロカーライド」に訂正する。

以上